

地域資料にみる谷川村の水害

神戸大学大学院人文学研究科

井上 舞

はじめに

今日の講座について

山南町域は昔から度重なる水害に悩まされてきました。今回の講座では、山南町域に残る資料を用いながら、谷川村を襲った水害について、どのような被害があったのか、その被害に対してどのような対応がなされたのかについて、紹介していきます。

- 1 山南町域と水害の歴史
- 2 絵図からみる江戸時代の谷川村の橋と井堰
- 3 寛政元年の水害と井堰の破損
- 4 慶応二年の水害と、谷川織田家の対応

1 山南町域と水害の歴史

1-1 丹波市域の水害の歴史 → [表①]『丹波史年表』にみえる江戸時代の水害記録

1-2 近代以降の山南町域を襲った水害 → [資料①]『山南町誌』に載る水害

2 絵図からみる江戸時代の谷川村の橋と井堰

2-1 江戸時代の谷川村

[資料②]『日本歴史地名大系』「谷川村」

東は南嶋村、篠山川左岸に沿って南下すると播磨国多可郡小苗村（現黒田庄町）。村の中央を北流して篠山川に流入する山田川が形成した扇状台地上に集落がある。慶長三年（一五九八）織田信包（柏原藩）領となる。正保郷帳に谷河村とみえ田高七八二石余・畠高二三二石余、「はへ山」・日損あり、水損少しあり。柏原藩領。慶安三年（一六五〇）同藩は改易となるが、当村は織田信包（のぶかね）の四男信当（のぶまさ）への分与地で、改易後も織田領として安堵されている（寛政重修諸家譜・徳川実紀）。『丹波志』には旗本織田家の陣屋が置かれていたともある。国立史料館本元禄郷帳では幕府領と織田領。『丹波志』によると織田領で高一千二七石余、家数三八〇。産土神は高座神社で別当寺として天台宗神宮寺があった（丹波志）。このほか若宮神社・八幡神社・天満神社・熊野神社・二ッ森神社・名可森神社・稲荷神社が現存する。天台宗常勝寺と臨済宗妙心寺派正覚寺があるが、『氷上郡志』には廃寺となった浄土宗妙楽寺、織田信当家の菩提寺の臨済宗雲光寺もみえる。

2-2 「慶応 4 年（1868）辰八月日丹波氷上郡久下両谷川村図」にみる橋と井堰 → [地図①]

篠山川

- * 橋：岡本橋、山崎橋
- * 井堰：大井堰、他 2 カ所

山田川

- * 橋：高池橋、和泉橋、薬師堂橋、平ノ垣橋、小橋、吟五郎橋、踊堂橋、大橋、サイカセ橋
- * 井堰：高田井堰、生田井堰、太七井堰

3 寛政元年の水害と井堰の破損

3-1 「六月十六日（十）八日洪水二付所々破損覚書控」 → [資料③]

- * 高座神社文書。寛政元年（1789）6月16日から18日にかけての洪水で、谷川村が被った川筋、井堰の被害の書き上げ。山田川の下流域から始まって、上流域までの井堰や土手の破損を羅列。
- * 主な被害：井堰の破損による用水供給停止、土砂の流入、土手の破損、川筋の変化、等

4 慶応二年の水害と、谷川織田家の対応

4-1 「慶応三丁卯年諸向留帳」 → [資料④]

- * 高座神社文書。谷川織田家の陣屋内の行事や、支配地の各村からの嘆願、それに対する対応などを書き留めたもの。
- * 前年の慶応2年（1866）の水害で、谷川村やその周辺地域は被害を被り、その普請の費用の補助を求めて、谷川織田家に嘆願書を出したとみられる。（おそらく、前年の「諸向書留」に記載）。[資料④]はその回答。
- * 両谷川村（奥谷川村・里谷川村）のほか、村森村、井原村、梶村、前川村、南嶋村にも同様の「申渡」がみられる。
- * 谷川織田家は、提出された村入用帳をもとに、前年に川筋の普請にかかった経費40貫223匁1分のうち、13貫400目を、「嶋新田」は15貫573匁3分6厘のうち、半額の7貫786匁6分8厘を谷川村に補助。

4-2 参考：「安政三丙辰年 村方諸事改法帳」

おわりに

- * 篠山川流域は古くから水害被害の多い地域。谷川村に関しては、山田川（谷川）の被害も深刻。
- * 水害の多い地域で、谷川村やその周辺地域の人々は、どのような生存戦略を持っていたか。残された史料によって、具体的に明らかにしていくことが必要。

[参考資料]

久下村誌編纂委員会『久下村誌』1957年

山南町誌編纂委員会編『山南町誌』、山南町、1988年

『丹波氷上郡志（復刻版）』上巻、名著出版、1975年（原本は昭和2年（1927）刊）

松井拳堂『増訂丹波市年表』、1960年

前田結城「近世谷川村の洪水被害とその「報告書」」（『広報たんば』2014年1月）